

英語による学術論文の 読解・執筆・発表能力の育成

杉 浦 正 利

＜要 旨＞

平成21年度よりアカデミック・イングリッシュを主眼に置いた新しい英語カリキュラムが始まる。このカリキュラムは、リーディング・リスニング・ライティング・スピーキングという4技能の単なる統合ではなく、研究拠点大学における英語教育の目標を「学術英語」に定め、その目標達成のために体系化されている点にその特徴がある。本稿では、カリキュラムの中で中核となる「英語(基礎)」・「英語(中級)」・「英語(上級)」という三つの授業が、まずパラグラフを基礎とし、次に中級ではパラグラフを構成要素とするエッセイを扱い、最後の上級では口頭での発表技能も統合したプレゼンテーションを扱うという体系化されたものであるということについて、主に文章構成法とライティング教育という観点から説明する。また、学術英語のための英語力の養成を目標に体系化された英語カリキュラムにおいて、その評価をどのように行うことが合理的かを考察し、実際に授業の評価の一部として使用する TOEFL と Criterion の導入は「国際標準」を想定したものであるという動機を説明する。最後に、どのような授業が行われるかという点について、英語科の示す「ガイドライン」と「推薦教科書」をあげて具体的に実際の授業運営について説明する。

1. はじめに

平成20年度第3回教育記者会懇談会(平成20年6月26日)において名古屋大学総長により「英語教育の改善について」という題目で公にされた通り、平成21年度から始まる名古屋大学の英語教育では「学術論文の読解力(academic reading, AR)と論文執筆能力(academic writing, AW)に主眼を

置く、さらに、聴解(listening)と会話(speaking)を含めたプレゼンテーション能力の養成を目指す。」ことになっている¹⁾。本稿では、この目標を想定した授業が具体的にどのようなものになるかについて述べる。

2. 新しい英語カリキュラム

2.1 特徴と目標

英語教育では、4技能（リーディング・リスニング・ライティング・スピーキング）という観点から授業内容を規定することが行われてきている。これは、書き言葉か話し言葉か、そして、理解か産出か、という2種類の要因を掛け合わせた結果としての種類分けである。確かに、個別の技能という点では、このように4種類に分けることは合理的であるし、トレーニングとしても、特定の技能に集中した方が効率的な面もある。しかし、これらの4種類のトレーニングが共通の目的もなく相互に関連もなく行われてしまったとしたら、総合的に見た場合、非効率なものとなってしまう。

新しい英語カリキュラムでは、技能別ではなく、まず、目標を定め、その目標に向かい個々の技能を統合しながら積み上げ式にカリキュラムを構築して行く点に特徴がある。

目標としては、学術英語（アカデミック・イングリッシュ）の養成であり、そこで必要とされる学術論文読解・執筆そしてプレゼンテーション能力を養成することである。これらのトレーニングを技能別に行うのではなく、基礎・中級・上級と順に発展的に技能を身につけて行くことを意図している。それぞれのレベルは、単により高度な英語を学ぶということではなく、それ以前のレベルでの学習を前提として積み上げ式に学習が行われる。

ただし、ここで注意しなければならないのは、学術論文の読解や執筆能力の養成を目標とはしているが、教養教育院で提供されるカリキュラムを終えたただですぐに専門論文が書けるようにはならないという点である。専門論文には、それぞれの専門分野ごとの文章構成法の「スタイル」があり、また、専門用語のみならず各分野で使われる慣用的な表現がある。いわば「一般学術英語」に対する「専門分野英語」と呼ぶべき性質の英語である。教養教育院での英語カリキュラムがカバーするのは、分野を問わず学術的な英語に共通する「一般学術英語」である。「専門分野英語」の教育に関しては、教養教育院だけでなく各学部との組織的・制度的連携体制を考えなければならないが、この点については、今回の英語カリキュラム改

革の射程を越える問題であり、大学全体として今後の課題として検討すべきでものである²⁾。

2.2 学術英語と文章構成

学術英語の根本は「根拠に基づき論理的に考えを述べる」ことである。このような学術英語で書かれた論文を読み、そのような論文を自ら執筆し、また、口頭発表できるようにするための基礎的能力を養うことが目的となる。そして、こうした学術英語の特徴は、具体的には「文章の構成法」として捉えることができる。日本語で書かれたものを英語に訳すとか、英語で書かれたものを日本語に訳すという、言葉を言葉で置き換える翻訳ではなく、英語の文章の中で「考え」とその「根拠」がどのように構成されているのか、また、自分の「考え」を「根拠」に基づきどのように構成して英語で表現（文章化・プレゼンテーション）すればよいのか、という「文章構成法」という観点から英語の基礎的トレーニングを行う。

学術英語の文章構成の基本的単位はパラグラフである。まずは、パラグラフが一つのまとまりを持った単位であるということ、そして、それを構成する要素があり、それぞれの要素がそれぞれの役割を持ってパラグラフ全体を構成しているということを理解させる。つぎに、パラグラフを一つの構成要素として、それぞれのパラグラフがそれぞれの役割を持って全体を構成してエッセイが成り立つということを理解させる。そのように論理的に構成したものを、いかにわかりやすく説得力を持って口頭で発表するかということがプレゼンテーションの基礎力の養成となる。

2.3 授業構成

積み上げ式のカリキュラムの特徴は、まさに授業科目名に現れている。1年生前期で「基礎」、1年生後期で「中級」、そして2年生前期で「上級」を学ぶことになっている。それぞれの「レベル」のキーワードは、表1のように対応している。

表1 積み上げ式カリキュラム

1年生前期	基礎	パラグラフ
1年生後期	中級	エッセイ
2年生前期	上級	プレゼンテーション

エッセイレベルでのリーディングやライティングができるようになるには、その前提として、エッセイの下位レベルのパラグラフを単位としたリーディングやライティングができていなければならない。また、エッセイレベルでの理解力・表現力ができていなければ、学術英語としてのプレゼンテーションを行うことはできない。厳密にいうと、パラグラフレベルとエッセイレベルとは「レベル」の差であり、それらの「レベル」とプレゼンテーションというのは「レベル」の差ではなく、「種類」の差であり、直線的な関係ではないが、トレーニングの順序としては、これらを基礎・中級・上級と位置づけるのが合理的であると考えられる。

カリキュラムとしては、これら「英語（基礎）」・「英語（中級）」・「英語（上級）」の他に、英語（コミュニケーション）も履修することになっている。これは、いわば、「英語（上級）」において口頭でのプレゼンテーションを行うための基礎的トレーニングと位置づけられ、英語を聞く力・話す力に関する基礎的能力を養う。ただし、この英語（コミュニケーション）においても、大きな目標は他の科目と共通の学術英語の養成であり、いわゆる「英会話」とは違う点を忘れてはならない。

3. 文章構成法

3.1 パラグラフの構造

パラグラフは、三つの要素から構成されると説明される。まず、そのパラグラフのトピックが何であるかを述べる「トピックセンテンス」、次に、具体的に話を展開する「主要部」、そして、主要部での話の展開に基づき述べられる「結論」である。「トピック」について、主要部で述べられる根拠に基づき合理的に判断すると「結論」に至るという流れとなる³⁾。

主要部で、どのような要素をどのように関係づけて話として展開するかというところに、展開法のパターンがある。展開法のパターンの典型例は、列挙・時間順・対比・因果の4つがあり、授業としては、こうした展開法のパターンがどのように英語として表現されているのか、また、こうした展開法はどのように表現すれば良いのか、ということをもとにリーディングとライティングとを行う。

3.2 エッセイの構造

エッセイは、パラグラフの一つ上のレベルと言えるが、それは、単に量

が増えるということではなく、文章構成上、構成の仕方の基本パターンには、並行的な関係があるという点が重要である。すなわち、エッセイを構成する要素は三つであり、最初に、イントロダクション（パラグラフではトピックセンテンスに該当）があり、次に、主要部があり、話はこの主要部で展開される。そして、最後に「まとめ」としての結論のパラグラフが位置づけられる。主要部は、典型的には3つのパラグラフから構成され、エッセイ全体は5つのパラグラフから構成されることになる⁴⁾。

4. ライティングと教育

4.1 「英語」文章構成法

パラグラフやエッセイの構成法は、英語文化圏の中で培われてきたと同時に、英語文化圏においては、とくに大学教育の基礎として「College Composition」とか「Freshman Composition」として指導されてきているものである。大学の授業で提出する「レポート」も、当然、こうしたパラグラフやエッセイの構成法をふまえた「論理的な」ものを書くことが要求される。よい「レポート」が書けなければ、単位が取れず、卒業もできない。逆に言えば、大学を卒業しているということは、「論理的」なパラグラフやエッセイを書くことができるという証となる。「論理的な英文」というのは、このように英語圏における作文教育の結果であると言える。

日本の大学では、従来、母語の日本語でのこのような基礎的な作文教育は行われてきておらず、また、授業の課題として要求される「レポート」も、参考資料をもとに「まとめ」ができればよしとされる傾向にあった。その結果、日本の大学を出ても、自分の意見を論理的に構成して文章をまとめるということではできなくても当然となる。

「英語は論理的で、日本語は非論理的」というのは二重の意味で間違っている。言語そのものに論理的な言語と非論理的な言語があると見なす点で言語学的に間違っている点と、文章が論理的であるかどうかを、教育の結果としてではなく、言語にその原因を帰している点である。英語でも文章が非論理的になることもあるし、日本語でも論理的な文章を書くことはできる。すなわち、これは言語の問題ではなく、教育の問題である。

4.2 ESL (English as a Second Language) とライティング

北米の大学に留学する場合、英語を母語としない留学生は必ず TOEFL

(Test of English as a Foreign Language) を受験しなければならない。TOEFL も長い間、リスニングと文法とリーディングが出題されていたが、そこにライティングが追加され、コンピューターベースの受験形態 (TOEFL CBT [Computer-based Test]) を経て、現在は、インターネットベースの試験 (TOEFL iBT [Internet-based Test]) となっている。現在のインターネットベースの試験は、スピーキングも含まれるようになっただけでなく、テスト内容が、より北米の大学での実際の授業を想定した形式になっている。例えば、300 語の英文を読み、それに関する講義を聴き、その概要を 20 分で 200 語程度にまとめるとか、45 秒で 100 語程度の英文を読み、それに関する 2 分の講義を聴き、30 秒で考えをまとめ、60 秒で説明するというような、かなり実践的な形態でのテストが含まれるようになっており、単に英語ができるだけではなく、北米の大学の授業形態に慣れていないと高得点が取れなくなっている⁵⁾。

試験の形態に変化はあるものの、リーディングやリスニングで出題される長文の「テキスト」や講義は、内容が学術的なものであるだけでなく、文章や話の構成が、しっかりとしたパラグラフやエッセイの構造をふまえたものになっている。また、ライティングに関しても、その評価基準が公開されている⁶⁾。この基準によれば、6 段階 (0～5) の最高点 5 を取るには以下の条件を備えていなければならない。

- トピックや課題について効果的に述べるができること [内容]
- 適切な説明や例をあげ、構成がうまくできていること [構成]
- 首尾一貫した話になっていること [構成・内容]
- 文法・語彙・表現が多様かつ適切に使えていること (ただし、多少の誤りはあっても良い) [表現]

すなわち、文章構成が良くできていれば、文法的な正確さに多少問題があっても高く評価されることがわかる。英語の文章構成法のトレーニングを積んでいない日本人学生が受けた場合、いくら語彙知識と文法知識があっても、それだけではライティングでの高得点は望めない。

5. 新英語カリキュラムでの評価

5.1 「国際標準」による評価

新しい英語カリキュラムでは、「国際標準の英語力をめざして」ということで、新英語カリキュラムによる英語教育の成果を「国際標準」をモノサシとして目に見える形で評価することになっている。これも英語カリキュラム全体が、4技能の寄せ集めではなく、明確な目標を持ち体系化されているために行えることである。具体的には、TOEFL-ITP (Institutional Testing Program) と Criterion を、入学時と1年生の後期の学期末に行なうことで、各学生の英語力の伸びを評価するとともに、これにより新しい英語カリキュラムの成果も評価されることになる。

5.2 TOEFL-ITP と Criterion

TOEFL-ITP は、現在 TOEFL の公式な公開試験を受験する場合に受けることになるインターネットベースのものではなく、従来行われていたタイプの印刷された冊子体を使うペーパーベースのリスニングと文法とリーディングの試験である。過去に実際に使用された試験問題を再利用し、特定の団体ごとに受験できるようにしたものである。前節で指摘したような北米の大学での実際の授業に対する慣れの影響を心配しなくて良いので、日本の中学・高校で英語教育を受けていた大半の学生にとっては受験しやすいはずである。Criterion は、オンラインのライティングの試験である。従来 TOEFL のライティングの試験 (Test of Written English) として行われていたものを、オンラインで自動採点できるようにしたものである⁷⁾。Criterion の評価基準をまとめると、以下のような三つの観点に整理できる⁸⁾。

- 課題に適切に応答しているか [内容]
- 文章構成・展開は良いか [構成]
- 文法・語法は適切か [表現]

4技能という観点から見ると、スピーキングが含まれないが、TOEFL-ITP と Criterion をモノサシとして使うことにより、新しい英語カリキュラムの成果がかなり正確に測れることになるはずである⁹⁾。

5.3 TOEFL と TOEIC

なぜ TOEIC (Test of English for International Communication) ではなく TOEFL かという点は、本質的には、本英語カリキュラムが目指しているのはビジネス英語ではなく学術英語であるという理由による。英語で書かれた論文の読解や英語で論文を執筆することを授業内容として取り扱いながら、その評価をビジネスを前提とした試験で測ることは不合理である。実際に就職の際に TOEIC の得点が聞かれるとか、日本では公開テストは TOEIC の方が受験しやすいという現実問題はあるが、それはいわば就職対策であり、就職活動にあわせて対策を取れば十分なことである。実際、TOEFL-ITP と TOEIC は、問題形式が似ているだけでなく、TOEFL-ITP で高得点が取れるような英語力がついていれば、短期集中的な試験対策(ビジネス用語や表現などの学習)をすれば十分高得点が取れるはずである。就職活動に役立つからという理由だけで、英語カリキュラム全体の評価のモノサシを選ぶことは、本末転倒であり、体系的に考えられた英語カリキュラムを歪ませることになるおそれがある。

6. 実際の授業運営

6.1 「ガイドライン」

実際の授業の運営に関しては、英語科の方で授業の担当教員に「ガイドライン」を示し、それを各教員が書くシラバスの「共通部分」とする。各教員は、「ガイドライン」を守った上で、実際の具体的な授業内容については個人の裁量に任せられる。例えば、「英語（基礎）」の「ガイドライン」は具体的には、以下のようなものを考えている¹⁰⁾。

英語（基礎） 目的・ねらい

- 研究拠点大学である名古屋大学の学生にふさわしい学術的な英語を使いこなす能力を身につける
- 学術的な英文に関する基礎的なリーディング能力とライティング能力を養成する
- 論理的な英文のカギとなるパラグラフの構造に着目し、目的に応じて必要な情報をいかに読みとるか、また逆に、自分の考えをその根拠とともにいかに説得力のある論理的な英文に組み立てるかを学ぶ
- 論文を英語で読んだり書いたりする時に、有用な多くの英語表現を学ぶ

<リーディング>

- パラグラフの概念、パラグラフと小論文（エッセイ）の基礎的な構成スタイルを学ぶ
- 背景知識（スキーマ）の活用、語彙チェック、大意把握（スキミング）、詳細情報の発見（スキヤニング）などの読解スキルを学ぶ

<ライティング>

- パラグラフの基本的な構造（トピック・主要部・結論）を学ぶ
- トピックセンテンスの書き方、主要部の展開方法（列挙、時間順、定義、分類、比較・対照、因果関係など）とその表現、及び、結論のまとめ方を学ぶ

6.2 「英語科推薦教科書」と授業例

基礎と中級の授業に関しては、「英語科推薦教科書」を選定してリストを作成しておき、英語科としては具体的にどのような授業を想定しているかを担当教員に理解してもらうよう努める。担当教員は「英語科推薦教科書」の中から選んで自分の担当する授業の教科書として使用しても良いし、それ以外の教科書を選んでも良いこととする。例えば、「英語（基礎）」の授業用「英語科推薦教科書」は、以下のようなものである。

Communicate Through Paragraphs

神保尚武・Robert Jupp, 桐原書店, 2002

Get Your Message Across: Writing Communicative Paragraphs

神保尚武 他, 南雲堂, 2008

Points to Paragraphs: A Process Approach to College Writing

Kayoko Otani and Kay Husky, Macmillan Languagehouse, 2004

Reading and Writing Paragraphs (パラグラフの読解と構成)

橋本光郎 他, 朝日出版社, 1991

Ready to Write: A First Composition Text

Karen Blanchard & Christine Root, Longman, 2003

Weaving It Together 2: Connecting Reading and Writing

Milada Broukal/宍戸通庸・家口美智子, 松柏社, 2004

Writing English Paragraphs

北尾S.キャスリーン・北尾謙治, 英潮社, 1991

Writing Techniques for College Students

「英語（基礎）」や「英語（中級）」の授業では、リーディングのみやライティングのみを技能別に教えるのではなく、文章の構成法という観点からパラグラフやエッセイの構成を学び、実際にリーディング教材においてどのような文章構成がなされているのかという分析や、自分が文章構成を考えてパラグラフやエッセイを書くという授業を行う。書き手と読み手という立場の違いはあるが、いずれにせよ、学術英語において不文律の共通概念として存在する文章の構成法に基づいて、基礎から中級へと学ぶことになる。

リーディングにおいては、英文和訳をさせるのではなく、文章がどのような要素から成り立っていて、それぞれの要素の全体における役割は何かという分析をしたり、文章の構成に役立つような英語表現に注目して覚えるなどの活動を行う。またライティングにおいては、和文英訳をするのではなく、どのような考えや根拠を含めるかという思考の整理を経てアウトラインを考え、文章に表現していく。そうした過程において、教室内で、相互に自分が書いているものを交換して、書き手と読み手という立場を入れ替えて、お互いに評価しコメントや提案をするという活動を行う。もちろん、教員やティーチングアシスタントからのコメントやフィードバックも行うが、それらも、語彙の適切さや文法的正確さという観点からの和文英訳にとまなう細かい添削をするのではなく、主に文章構成法という観点からのコメントを行うようにする。

7. むすび

平成21年度よりアカデミック・イングリッシュを主眼に置いた新しい英語カリキュラムが始まる。本稿ではその中で中核となる「英語（基礎）」・「英語（中級）」・「英語（上級）」という三つの授業が、具体的にどのような発想に基づき体系化されているかについて、主に文章構成法という観点から説明を試みた。また、学術英語を目標に体系化された英語カリキュラムにおいて、その評価をどのように考えるかについて、TOEFLとCriterionの導入の動機の説明を通して議論した。最後に、具体的にどのような授業が行われるかという点について、「ガイドライン」と「推薦教科書」をあげて実際の授業運営を説明した。

第2節でも言及したように、今回の英語カリキュラム改革は、大学英語教育の大局的な目的を学術英語に定めてカリキュラムを体系化したものであるが、大学4年間のうちの前半部分にあたる「一般学術英語」を対象としたものである。後半部分にあたる「専門分野英語」の教育に関しては、大学にとって今後の課題として残されている。

注

- 1) 平成20年度 第3回教育記者会懇談会 「3 英語教育の改善について（資料3）」
(http://www.nagoya-u.ac.jp/out/edu/pdf/080626_2.pdf, 2009年1月6日確認)
- 2) 「学術目的の英語」(English for Academic Purposes)に関する議論は、竹蓋・水光(2005)に詳しい。
- 3) 「トピック」と判断の結果としての「結論」をまとめて「メインアイデア」とする場合もあるが、本稿では、パラグラフの構造の細かい説明や議論は省略する。
- 4) 全体の構成と全体を構成する部分の構成が相似的である構造を「フラクタル」と呼ぶ。文章構造もフラクタルになっている。5つのパラグラフから成るエッセイを一つの単位として、さらに一つ上のまとまりを構成することができ、さらに、それを一つの単位としてより大きな単位にまとめるということを繰り返すことで、「本」を書くこともできる。
- 5) 実際に、英語での授業に耐えられるかどうかを試すという点では、目的により合ったテスト形態にはなっているが、英語力そのものだけではなく授業形態への慣れが大いに影響するので、純粋に外国語としての英語能力試験としての適切さという観点からは、現在の形態が望ましいかどうかは議論の余地がある。
- 6) iBT/Next Generation TOEFL Test Integrated Writing Rubrics (Scoring Standards)
(http://www.ets.org/Media/Tests/TOEFL/pdf/Writing_Rubrics.pdf, 2009年1月6日確認)
- 7) Criterionの仕組みについて、詳しくは、Burnstein(2003)を参照のこと。
- 8) Criterion Online Writing Evaluation Scoring Guide
(<http://www.ets.org/Media/Products/Criterion/topics/toefl.htm>, 2009年1月6日確認)
- 9) スピーキングを含まないという点は、今回の新英語カリキュラムで養成するようなスピーキング能力を測定する適切なスピーキングの試験がないとい

う理由と、2回目の試験を全学で統一的に実施するには1年生の終了時しかないにもかかわらず、スピーキングを含むプレゼンテーションを扱う上級レベルの授業は2年生で実施されるため、適切にカリキュラムの成果としてのスピーキング能力を測ることは時期的に困難である理由がある。

10) ただし、まだこれは本稿執筆段階では暫定案である。

参考文献

Burstein, J., 2003, “The E-rater Scoring Engine: Automated Essay Scoring With Natural Language Processing”, Shermis, M. D. and Burstein, J. eds, *Automated Essay Scoring*, Laurence Erlbaum, 113-21.

竹蓋幸生・水光雅則（編）、2005、『これからの大学英語教育－CALLを活かした指導システムの構築』岩波書店。